



柔道と私

会員 金子 正志 <38期>

私と柔道の関わりは、人様にお話できるようなものではない。自分でも、何故今でも柔道と関わっているのか、わからないのだから。

早稲田大学柔道部副将の兄の影響で柔道を始めたのは、埼玉県立浦和高校1年の時であり、私は入学式の翌日には柔道場で稽古を始めていた。高校時代、私は県下ではそれなりに名の知れた選手だった。しかし、3年生の時に、出場すれば間違いなく県代表になれる位置にシードされていた関東大会個人戦・予選に膝の怪我で出場できなくなったのがケチのつけ始めで、その後も、関東大会団体戦・インターハイ・国体と県の代表の座を逃してしまった。

高校時代の不完全燃焼を大学で取り戻そうと、慶應義塾大学体育会柔道部に入り、苦しい稽古に耐えた。5月の東京大学、6月の全日本学生優勝大会、10月の早慶戦をめざし、各大会の1〜2か月前から、全体合宿、レギュラー合宿、調整合宿と続き、その間は早朝・午前・午後と各2〜3時間、1日8時間以上、柔道の稽古にどっぷりとつかっていた。日体大をはじめ一部上位校へもたびたび出稽古に出かけ、板の間に投げつけられながらだんだん強くなっていった。当時、慶應大学は一部16校のうちベスト8にはなれない下位校にいたので、一部校に入り続けるためには、決して気が抜けなかった。夏の暑い時期、道場の片隅に、稽古中の打ち身・捻挫に備え、大きなポリバケツに水が張られているのだが、痛みを和らげるために足をそのまま突っ込んだり、患部を冷やすためにタオルをつけたりして汚れている水が、稽古で疲れきった身体には、森の奥に湧く清水のように思え、その誘惑に負けて思わず口にしたことを今でも思い出す。

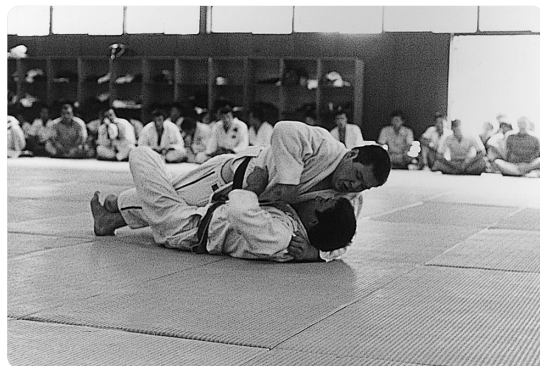
大会のない普段も、夕方からの数時間の稽古を中

心に1日の生活がまわっていた。本当に、大学生活は柔道中心の、柔道だけの生活だった。その甲斐があつたか、私自身、師範には目をかけていただき、学内でも早くからレギュラーに指名され、早慶戦では優秀選手に選ばれたり、夏に行く地方遠征でも活躍したものの、肝心の東京大会や全日本学生優勝大会では自分で考えていたような活躍はできなかった。

確かに、高校・大学を通じ柔道で完全燃焼できなかったことが、司法試験チャレンジへの動機となったのだから、柔道における不完全燃焼がなければ、今の自分はないかもしれない。だが、今でも夢に出てくるのは、勝った試合ではなく、負けた試合の情景である。そして「あそこで、相手の引き手を切っておけば…」等と夢の中で反省しているのである。

現在、柔道着に腕を通すのは、年に数えるほどしかない。ただ、選手という立場を離れ、平成8年から6年半にわたり(社)全日本学生柔道連盟の監事を、平成14年からは(財)全日本柔道連盟の専門委員会委員を務め、裏方として柔道との関係が続いている。

何故、あんなにきつくて苦しい柔道との関係が続くのか、自分でもわからないが、今後も、その縁が切れることはないだろう。



写真上が筆者